

■ 論文 ■

「似ている」とは「同じ」ではない
— 日独大学生の「幸福」についての評定 —Florian Coulmas¹
Wolfgang Jagodzinski²
Rie Suzuki³
Annelene Wengler⁴

■ 要 旨 ■ 幸福に関する東アジア的理解は西洋的なそれとは異なり、これはアジア社会が集団主義的でありがちなのに比べて、西洋社会が個人主義を重視するからであるということ、そしてそれゆえに両社会における幸福の比較は難しいということがしばしば論じられる。幸福に関する人々の認識・評価・感情は東アジア社会と西洋社会とではどの程度異なるのか—これを調べるための一つの方法は、幸福のしろうと理論について検証することだろう。本稿は、日本人大学生とドイツ人大学生を対象に行った幸福に関する調査についての報告である。「幸福な人」「*glücklicher Mensch*」という二つの言葉の意味微分と質問票から得られた結果をもとに、各学生グループにどのようなことが幸福の要因になると信じられているのかについて述べる。また、調査結果は2つのグループ間には類似点と相違点の両方が存在することを明らかにしている。日本がドイツに比べて集団主義的な社会であるという概念に矛盾しないことを示す結果が見られたと同時に、これとは異なる見解を生む結果も得られた。日本とドイツにおける幸福の概念は、似ているとはいえ同一ではない。

■ キーワード ■ 幸福のしろうと理論、異文化間比較、意味微分

1. はじめに

本研究のテーマは日本とドイツにおける「幸福」である。幸福研究における一般的かつ重要な問いは、“幸福が異なる人々にとって同じことを意味しているかどうか”であろう (Diener and Suh 2002)。文化相対主義者は、幸福における異文化間比較研究の可能性を否定する根拠として、「幸福」という概念に明確な定義や文化的に中立な基準が存在しないことを挙げている (Colby 2009)。定量的研究者もまた、「幸福」という概念が文化間で比較可能であるかどうかに関して、時折疑問を投げかける (Veenhoven 1993)。しかし Kahnemann (1999) は、幸福の認識のされ方が人々の間で異なる

1. ドイツ日本研究所東京
2. ケルン大学応用社会学科
3. 成蹊大学国際教育センター
4. ケルン大学経済・経営管理・社会科学部

かどうかや、幸福を追求する際の焦点が文化によって異なるかどうかは、あまり重要なことではないと論じている。個人が主観的幸福（喜びや苦しみを経験）を評定するように求められるとき、彼らを幸福または不幸にした具体的な出来事や衝撃の客観的特質というものは、さまざまな背景を超えた「幸福」を評価し比べるには無意味となるだろう。しかし、“幸福の評定は難しい”ということに関して幅広く同意が得られる背景には、(1) 幸福が一人ひとりの生活環境に関連した極めて主観的な側面を扱う個人的な問題であること、(2) 幸福の客観的な側面や条件は歴史的状況に左右されること、(3) 異なる言語における「幸福」の意味的等価を決定づけられるような、文化的に中立な概念言語というものが存在しないこと、などがある。さらには、しばしばそう扱われがちではあるが、“幸福が人生の目的として重要視される度合はどこでも同じである”ということを決して前提にはできない。それゆえに、幸福における文化的相違がなぜ、どのように起こるのか、また個人の幸福における文化の役割がどのようなものであるのかについては、難しい問題が残る。

文化間の幸福の意味の違いを調査するための一つの手段は、幸福指標の信頼度を確認することである。たとえば Oxford Happiness Inventory (Argyle, Martin and Crossland 1989) は、これまでに様々な言語環境で実施されている (e.g., Lewis, Francis and Ziebertz 2002, for German)。異文化間研究では、Brislin (1970) によって最初に開発された「戻り逆翻訳」の手法も、翻訳された刺激項目間の意味的等価を保証するために用いられる。Kitayama and Markus (2000) は、幸福（主観的幸福）の経験が文化に根付いていることを強く示す事例を発表している。幸福の文化的側面がしばしば暗黙的なものであるという観点から考えると、同研究は調査に基づく研究全般に難題を突き付けるものであろう。そこで我々は、2つの異なる方向から、この意味の問題に段階的に迫っていくことにした。まず、本稿では「幸福」と Glück という、日本語とドイツ語で“幸せ”という概念をあらわす言葉の意味について調査する。続稿では、幸福に関する日本人とドイツ人のしろうと理論 (lay theory) について比較・分析する。両稿を合わせ見た結果、日本人とドイツ人から幸せの概念は大部分において合致しており、幸せに関する両者の平均的な考えもまた似ているということが示唆できる。

2. 概念的枠組み

2.1 明示的・暗示の意味

ことばには、明示的あるいは文字通りの意味と暗示的あるいは連想的意味のどちらもが存在する。ことばの明示の意味とは、辞書の定義がとらえようとするものであり、文字通り意味するものである。一方で、ことばの暗示の意味とは、そのことばに関連する他の概念から作られる。たとえば、全ての日本語話者にとって「白い」という語はある種の状態、白い色であることを意味する。この語の暗示の意味というのはいちど多様であり、その語を用いる人の嗜好や職業、社会化、観念形態などによる。厳密に同義といえる語はあくまで明示の意味でのみ同義ということであり、つまり言語学用語で言うところの「指示的類義語」という、真偽条件の点から説明されるものである。たとえば、「白い」と「純白」が指示的類義語であるのは、前者または後者の語があるかどうかのただ一点だけが異なる文章の対の全てが同じ真偽値を保っている時のみである。しかしながら、ことばの意味というものは、その使用を支配する真偽条件だけで余すところなく説明できるとは限らない。

「白い」と「真っ白」と「純白」は標準的な辞書ではそれぞれの類義語として記載されているが、これら3つの語の言外の意味は異なり、それらの語がそれぞれに用いられるコンテキストから推測されるものである。「頭が真っ白になる」とは言えるが、「頭が純白になる」とは言わない。さらにこの例で言えば、「純白の花嫁」のインターネット検索には1秒で60万以上のヒットがもたらされるが、「白い花嫁」ではこの3分の1以下の数になるだろう。言外の意味とは多岐にわたるものであり、ことばによって暗示または示唆される特徴に及ぶだけでなく、しばしばそのことばが用いられるコンテキストにも依る。明示の意味が指示的である一方で、暗示の意味は情動的でありつつも当該のスピーチコミュニティの文化によって形成される。つまり、偶発的でもなければ、完全に個人的というわけでもない。暗示の意味はあらゆる生存言語において機能的に重要な側面を形成している一方で、ことばの標準的な辞書定義の一部ではないのである。異文化間・異言語間研究において、この点はそれゆえにしばしば無視されているが、ことばの本当の意味的等価とは明示的等価・暗示的等価の両方を必要としている。

ことばが生み出す言外の意味を決定づけることは、一つの言語の中でさえも難しく、異言語間研究ともなればその作業はさらに複雑化する。しかしながら、それは必要不可欠なプロセスである。幸福における異文化間研究では、調査対象者の言語で聞き取り調査やアンケート調査を実施するという過程を回避できない。一つの言語の中で起こることばの同義性の問題と同様に、異なる言語における意味的等価の評定はたいがい暗示の意味よりも明示の意味に拠っている。しかし、比較研究において特に興味の対象となるのは暗示の意味のほうであろう。なぜなら暗示の意味とは把握が難しいものであり、しばしば内観からも隠されているからである。ゆえに本研究において、われわれは暗示の意味を測定するために用いられる有名な手法—SD法（意味微分法・Semantic Differential）を再考することにした。

2.2 SD法:概略と理論的解釈

SD法はもともと心理学者の Charles Osgood と彼の仲間たちによって、意味測定のために開発された手法である (Osgood, Suci and Tannenbaum 1957)。典型的には、一単語あるいは短い複合表現が α から β (もしくは $+\alpha$ から $-\alpha$) の尺度間の数値で評定される。この尺度は相対する形容詞対、たとえば“暖かい—寒い”や“早い—遅い”などで構成され、7段階評価が一般的である。7段階は結合して意味空間を作る。多くの研究の結果、このような方法で両極尺度上の測定値によって位置づけられた、ある概念の意味空間は3つの次元—(1) 評価性 (「良い—悪い」)、(2) 力量性 (「強い—弱い」)、(3) 活動性 (「早い—遅い」)—によって構成される。この3つの要素は、多数の単語や表現を多数の尺度を用いて評定サンプリングした結果、最も頻繁に関連性を見せるものであった。それぞれの尺度は互いに独立して存在し、異なる尺度の測定値と連動することがない一方で、ほとんどの共評価を説明することができる (Heise 1970)。さらには、こういった特質は言語の壁を越えて保たれており、それぞれの要素の負荷は語源的に全く関係のない言語間 (e.g., 英語とフィンランド語) や文化的に異なる言語間 (e.g. ドイツ語と日本語) においても同じく [評価性] [力量性] [活動性] である。ゆえに、これらの3要素は超文化的な意味空間の側面を構成するとみなされている (Osgood 1964)。

あることばの意味—言外の意味を含む—とは、そのことばが属する言語を操る能力のある者が、そのことばを他のことば（やそのことばの奥に潜む概念）と関連付けることで決定されると言えよう。SD法は2つの基本的発想を前提としている。1つには、言外の意味は個人的な現象というよりは集合的な現象（例えば言語文化・社会的環境）によって形成されるということ、もう1つは、ことばの意味は相関的であり、他のことばの意味にも依るといことである。SD法の異言語間調査では、調査尺度で用いられる形容詞と評定対象の単語・表現は、最低でも指示的類義語であるという意味で翻訳等価でなければならない。

暗示の意味を測定するSD法の手法には、さまざまな批判がある。

- 信頼度調査の方法を持ち合わせていないことについて
- 成立可能な尺度の全てが〔評価性〕〔量性〕〔活動性〕の3次元に集約できることをうまく証明できていないことについて
- 調査尺度で用いられる形容詞に関しての調査対象者の認識には左寄りまたは右寄りの偏りがあるかもしれないにもかかわらず、尺度の中間点を0としていることについて（形容詞の有標性の問題）

確かにこれらの方法論的批判は軽率に斥けられるべきではないだろう。しかし2つの単語の意味を決定付けるといよりも、その単語間の意味的等価について究明するという本調査の目的を達成するためには、SD法は有益な手段といえる。また、このような方法論的弱点は日独両言語調査に公平に影響することから判断すれば、両言語間の比較そのものに大きな影響を与えるものではないとも考えられる。

「双極関係にある形容詞対のみを調査尺度として利用する」という技法は、調査対象語彙に対する調査対象者の反応を比較的容易に得ることを可能にする。これはSD法を採用する大きな利点といえよう。本研究では、SD法を発見的目的のために利用する。具体的に言えば、我々は「幸福な人」と *glücklicher Mensch* という2つの表現に指示的類義関係があると推測する。つまり両方の表現が、“幸せな状態にある人間”という概念を示しているということである。さらに、両表現の意味がこれらの表現の基になる概念と一致すると推測する。SD法を採用することによって、日本とドイツにおける“幸せな状態にある人間”の概念に関して、何か特筆すべき程度の暗示的意味の相違、または態度面での相違があるかどうかを解明しようとしている。仮にそのような相違が認められるとすれば、その相違が問題概念の情動的側面及び言外の意味における相違や、尺度の意味における相違に反映されているのかどうか、ということが方法論的に挑戦的な問いとなるであろうが、本稿ではこの問題について言及しない。相違点があるとすれば、それは“幸せな状態にある人間”の概念に関して日本語とドイツ語の意味空間上の位置づけが違うということを示している。さらに、両言語における幸福の概念が全く同一ではないことを意味している。そして、そこでその相違をどのように解釈すべきなのかという問題が浮上する。続稿では、日本とドイツにおける幸福に異なる角度から迫っていく。そこでは本稿で扱う意味微分調査の対象者に対して、何が幸福につながり、何が幸福を脅かすのかについての実践的な質問を含んだ質問票を用いた調査を行う。ゆえに、以下に示さ

れる「幸福な人」と glücklicher Mensch の意味微分分析は、“幸せな状態にある人間”の概念についての理解が二つの文化間で似ているのかどうかについて把握するために設計された調査手段としてみなされるべきものである。

2.3 推測

SD法の3つの次元に関して、われわれは日本人とドイツ人の調査対象者間に幅広い同意を期待した。事実、過去の研究における幸福の定義は、精神の良好な状態・楽しみ・喜び・満足と関連付けられている (Diener 1994; Diener, Suh and Oishi 1997; Veenhoven 2009 その他を参照)。この点はSD法調査で扱った日本語とドイツ語の表現の言外の意味の中に「[評価性]の次元で測定された数値が+領域に偏っている」という形で反映されると考えられる。「[力量性][活動性]という他の2つの次元に関しては、ここまで明確な推測はできない。「幸福な人」と glücklicher Mensch の連想では、強度、熱、力といった[力量性]の次元に属する要素は文化的になりがちであり、おそらく調査対象者の年齢によって特徴付けられるような変異になると考えられる。これに類似して、[活動性]の次元に沿った文化的変異もまた存在するだろう。幸せな状態にある人間という概念は一つの文化では“動的・精力的・自己主張のある・攻撃的”という要素で構成されているのに対して、異なる文化では“おおらか・気楽・落ち着いた・穏やか・控えめ・のどか”というのが重要な要素であると想像できる。

日本とドイツの大学生の間に見られるかもしれない相違点に関して言えば、評価的・情動的次元は非常に興味深い。過去に実施された様々な調査が繰り返し示しているように、日本における幸福の平均レベルは比較的低い (c.f., 例えば内閣府経済社会システム 2010)。このような観察は、日本における幸福の重要性は他の国々のそれよりも低いのか否かという疑問を生む。以下に続く分析によって、われわれはこの問題への部分的な解答を提供する。さらに、日本とドイツの大学生が[力量性]と[活動性]の意味微分次元に関してどのように幸福を評定するのか比較する。

2.4 データとその操作

日独の大学生がそれぞれどのように幸福を理解しているかについて実践的に調査するために、日本では中央大学と上智大学、ドイツではコロン大学で調査を行った。日本での調査は2009年11月、ドイツ調査は2009年12月から2010年の2月の間に実施された。調査対象者は83名の日本人学部生と134名のドイツ人学部生で、そのうち日本人対象者の64%とドイツ人対象者の59%が女性である。まず、総合的幸福度に関しては4段階(1-とても幸せ、4-とても不幸せ)で評定された。結果、日本人学生の評定平均値は1.58であったのに比べ、ドイツ人学生の評定平均値は2.00であった。また、総合的な生活満足度に関しては10段階(1-満足していない、10-満足している)で評定され、日本人学生の評定平均値は7.37であったのに対し、ドイツ人学生の評定平均値は7.14であった。幾つかの国際的調査によれば、日本人は西ドイツ人よりもわずかに生活満足度が低いという結果が出ている。一方で、本調査における日本人対象者グループはドイツ人対象者グループと比べて幸福度が高いと言える ($p=0.015$)。

日独両調査で使用した質問票はドイツ日本研究所 (DIJ) のホームページから入手可能である

(http://www.dijtokyo.org/publications/2009_national_survey_on_lifestyle_preferences.pdf)。意味微分のセクションは10の形容詞対で作られた7段階評定尺度が用いられた。そのうちの4尺度(良い-悪い、肯定的-否定的、暖かい-冷たい、甘い-酸っぱい)は情動的/評価的な暗示的意味を持つ。「暖かい」「甘い」「肯定的」などといった形容詞は調査項目「幸福な人 / glücklicher Mensch」の概念が内包する感情を測定するのに用いられる。1尺度(強い-弱い)は力量性に関連し、2尺度(積極的-消極的、早い-遅い)は活動性に関連している。残りの3尺度はSDの3次元とは明確な関連性を持たない。これは調査対象者の回答の偏りを避けるためである。回答に際しては、調査対象者はあまり考えずに素早く評定し、また評定尺度と調査項目「幸福な人 / glücklicher Mensch」との間に関係性を見出せない場合には尺度の中間点を選択するように指示されている。調査項目「幸福な人 / glücklicher Mensch」は、「幸福 / Glück」という極めて一般的な概念を用いた場合より、調査対象の学生の評定活動が容易になるだろうと想定して用いられた。

3. 実証的分析

実証的分析は2段階で行われている。まず、10の双極尺度で測ったドイツ人調査対象者と日本人調査対象者の平均値を、これらの変数が同じ尺度を持っているという推測的前提のもとで比較する。これは大まかに言えば、両方のグループがそれぞれの変数において同じ位置付けをしているとき、同じような感情と価値付けを示しているという意味を含む。また、3.1は先の推測的前提をいくらか修正するものである。第一に、[評価性][力量性][活動性]の3次元における暗示的意味とは、直接的に観察可能なものとして扱われない。むしろそれらは基礎的な、或いは潜在的な変数として概念化され、10の双極尺度サブセットから統計的に推測される形をとる。調査対象者から観察された反応によって測定されたこれらの潜在変数にどれほどの信頼性があるかを分析するには、さまざまなプログラムを用いることが可能であるが、本研究では LISREL 8.5 を用いる。これは LISREL 8.5 によって、10の双極尺度の全てまたは幾つかが潜在変数の測定のための尺度等価な手段かどうかを解明することができるからである。

3.1 意味微分の分析結果

図1は10の双極尺度における日独調査対象学生の評定平均値を示している。ドイツ人学生の平均値は黒の線で結ばれており、日本人学生の評定平均値はグレーの点線で結ばれている。このような方法で示された両者の分析結果は大変似ているといえよう。日独両学生が、幸せな状態にある人間の概念を「暖かく」、「良く」、「肯定的」で「甘い」ものとして評定している。彼らはまたこの概念をむしろ「積極的」で「強く」、少しだけ「早い」と認識しており、「厳しい」というより「優しい」ものであることについて同意している。

しかしながら、両グループの回答には、大きくはないが有意差のある相違点が複数見受けられる(別表部分の表 A1 を参照のこと)。日本人学生と比べた時、ドイツ人学生は幸せな状態にある人間に、より高い度合の肯定性や力量性、及び、僅かに高い活動性を見ている。一方で、日本人学生が幸せな状態にある人間を「暖かい」「静かな」と評定する値はドイツ人学生のそれを凌いでいる。実

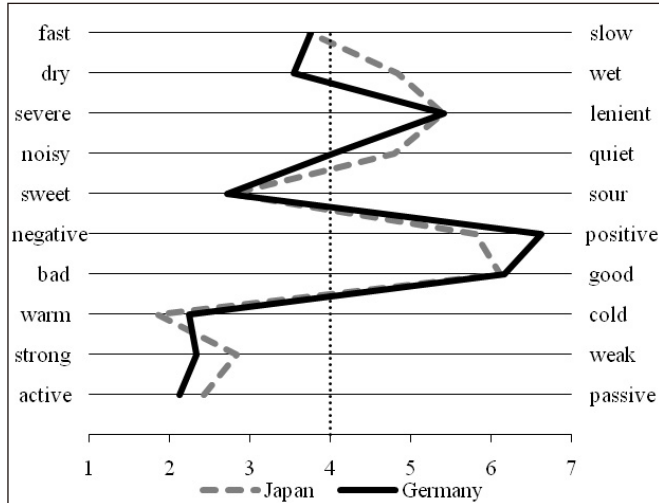


図1 「幸せな状態にある人間」の意味微分のプロファイル
 日本語: 「幸福な人」; ドイツ語 glücklicher Mensch
 日本人学生とドイツ人学生の平均値の7段階評価
 注: 平均差テストに関しては別表部分の表A1を参照のこと。

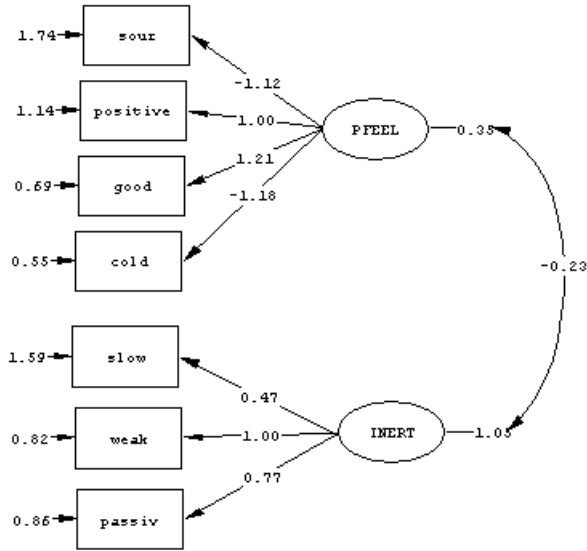
際、ドイツ人学生は、幸せな状態にある人間が「静か」か「うるさい」かについての態度を明確に示していない。

3.2 共分散構造分析

本稿におけるこれまでの推測は、「自分たちの本当の気持ちを控えめに言う」という先に述べたような日本人調査対象者にしばしば見られる傾向を無視したがために、ある意味簡素なものであった。ゆえに、「否定的—肯定的」尺度における日本人調査対象者の平均値の低さは、上記の傾向のあらわれと言えるかもしれない。

このような問題はしかしながら、「言外の意味とは複数の指標によって測定された潜在変数として概念化されている」という先述の条件下で検討されるべきだろう。「良い」「暖かい」「甘い」といった形容詞は通常、感情や評価を表すために用いられるものであり、対応する尺度はそれゆえに潜在的な情動的・評価的要素の多重標識として捉えられるのが適切である。「強い—弱い」「積極的—消極的」「早い—遅い」の3尺度に関しては、状況はあまりはっきりしない。[活動性]と[力量性]という二つの独立した次元を特定するには数値的に小さすぎるが、両者を切り離して捉えることは出来ないということは示されており、両者間に高い相関性が見られるとは言える。それはともかくとしても、これらの3尺度は[力量性]という第二潜在変数の指標として扱われている。残りの3指標は感情や能力の指標として解釈されるわけでもなければ、別の潜在的要素を測定するために結合するわけでもない。言わば、分析の中にホワイトノイズを作り出しているだけであり、分析の対象から除外した。

より詳しいモデルは図2が示すとおりである。上部に関しては、先の推測に適合しているといえよう。感情や評価を測定する4指標は全てPFEEL (positive feelingの短縮形) と呼ばれる潜在変数



Chi-Square=32.81, df=35, P-value=0.57401, RMSEA=0.000

図2 「幸せな状態にある人間」の2つの潜在構成要素としての
力量性と評価性LISRELモデル

に関連している。このラベルが選ばれたのは単に、「良い—悪い」という尺度は時に感情と評価を同時に示すが、感情に関しては常に目安となっており、このような尺度で測定するのが一番適切であると判断できることに拠る。左側の四角で囲まれた箱部分は、各双極尺度をそれぞれの最高値ラベルによって示している。例えば、「酸っぱい」は「甘い—酸っぱい」の尺度では7になるので、最初の箱のラベルとなっている。「積極的」は「積極的—消極的」尺度の最高値7にあたるので、その次の箱のラベルとなっている、というように続いていく。PFEELは高い値が肯定的な感情を示す2つの変数（「肯定的」「良い」）にプラスの効果をもたらし、高い値が否定的な感情を示す2つの変数（「酸っぱい」「冷たい」）にマイナスの効果をもたらす。つまりPFEELにおける高い値は肯定的な感情を意味する。もう一つの潜在変数は力量性と活動性を示すが、逆にコード化されている。“幸せな状態にある人間”を「遅い」「消極的」「弱い」と結び付ける調査対象者がこの潜在変数に高い値をつけるため、INERTと呼ばれる。複数の因子との関連（cross-loading）や相関誤差が認められないため、モデルは極めてシンプルな構造となっている。

これは図2から明らかになることではないが、このモデルはPFEELの4指標のうち2つとINERTの全指標が尺度等価であるという想定の下で規定されている。テストは平均ベクトルと双極尺度の共分散行列をもとに行われる。モデルの試算は日本人調査対象者に言及している。それぞれの箱の左側の数字は誤差分散であり、双頭矢印の数字は2因子間の共分散を、残りの数字は規格化されていない因子負荷量（unstandardized factor loadings）を示している。ユニット変化に関して言えば、肯定的な感情は「悪い—良い」尺度に最も影響を与える。もし潜在的な感情が1ユニット変われば、「悪い—良い」尺度が1.21ユニット変わる。「肯定的—否定的」尺度におけるPFEELの影響は最も低い。潜在変数のユニット変化が、尺度のユニット変化に一致する。第二因子であるINERTの1ユニット

の増加は、「強い—弱い」尺度に似たような変化をもたらしたが、他の2つの双極尺度にはもっと小さな変化をもたらした。

同じ因子負荷量であるため、ドイツ人学生のためのモデルを見せる必要はないだろう。両グループで不変因子負荷量を用いるということは「スコアの高質性」という前提条件である。ドイツ人学生と日本人学生がSD尺度に似たような方法で関連するかどうかを検証するためには、2つの方程式から説明されるに違いない2番目の条件が指定されるべきである。

図2のモデルの中で、日本標本の中の各指標 x_i^J は次の方程式に沿って2つの潜在変数 PFEEL^J と INERT^J に相関する。

$$(1) \quad x_i^J = b_{i0}^J + b_{i1}^J \text{PFEEL}^J + b_{i2}^J \text{INERT}^J + \varepsilon_i^J$$

これはPFEEL^JとINERT^Jがスコアのわからない潜在変数であるという唯一の違いがあるだけの標準的な回帰方程式である。言い換えれば、 b_0^J が定数、 b_1^J と b_2^J は傾き或いは規格化されていない因子負荷量、そして ε_i^J が誤差項である。モデルを単純指標 (pure indicators) を用いて規定しているので、2つの傾きのうち1つは常に0である。指数 i は i 番目の変数という意味であり、調査対象者のことではない¹⁾。上付き文字の J はこれが日本人標本のための方程式であるということを示している²⁾。これに対応するドイツ標本のための方程式は以下ようになる。

$$(2) \quad x_i^D = b_{i0}^D + b_{i1}^D \text{PFEEL}^D + b_{i2}^D \text{INERT}^D + \varepsilon_i^D$$

PFEELとINERTは、ドイツと日本の標本における全ての対応変数 x_i^D と x_i^J 、定数 ($b_{i0}^J = b_{i0}^D$)、傾き ($b_{i1}^J = b_{i1}^D$, $b_{i2}^J = b_{i2}^D$) が同じか不変である場合にのみ、同じ尺度で測定される。これらの制限がデータに課されているとき、モデルは適合しないことが判明した。図1はこれがどうしてそうなるのかについて示唆している。PFEELの4指標のうち2つに関して、ドイツ人調査対象者と日本人調査対象者はかなり類似した平均値を出している(「酸っぱい」と「良い」について)。「暖かい—冷たい」尺度に関しては、日本人の平均値のほうがプラスの極により近く、「肯定的—否定的」尺度に関してはドイツ人の平均値のほうがプラスの極に近い。PFEELに関する両者の平均値がどうであれ、もし両者の定数が同じであれば、モデルはここで観察される4つの平均差を再現しないだろう。

1) わかりやすくするために、二番目の指標 (人の指標) は除去されており、変数はベクトルとして表現されている。

2) LISRELの表記法では、方程式は $x_i^J = \tau_i^J + \lambda_{i1}^J \xi_1^J + \lambda_{i2}^J \xi_2^J + \varepsilon_i^J$ と書かれている。表1ではこの表記法が括弧内に示されている。

表1 Partial scale equivalence of evaluation and potency/activity in groups of German (DE) and Japanese (JP) students: A LISREL group comparison

1. Goodness of Fit of the Model

	χ^2	%	RMR ^{a)}	GFI ^{b)}	n
JP	19.19	57.28	0.057	0.94	80
DE	14.31	42.72	0.045	0.97	132
Total	33.50 ¹⁾	100.00			

Root Mean Square Error of Approximation: RMSEA=0

a) Standardized Root Mean Square Residual

b) Goodness of Fit Index

1) $p = 0.54$ with 35 degrees of freedom;

2. Parameter Estimates

Measurement Model		Factor loadings (λ_{ij})				Con- stant (τ_i)	Error Variance (δ_i)
		Standardized ^{a)}		unstandardized			
		PFEEL	INERT	PFEEL	INERT		
Sweet – Sour	JP	-0.56		-1.12		2.73	1.74
	DE						0.70
Negative – Positive	JP	0.50		1.00		5.82	1.14
	DE						0.35
Bad – Good	JP	0.61		1.21		6.17	0.69
	DE						0.72
Warm – Cold	JP	-0.59		-1.18		1.84	0.55
	DE						0.68
Fast – Slow	JP		0.41		0.47	3.87	1.59
	DE						1.50
Strong – Weak	JP		0.87		1.00	2.77	0.82
	DE						0.40
Active – Passive	JP		0.68		0.77	2.44	0.86
	DE						0.77
Latent Variables		FEEL	INERT	FEEL	INERT		
		Standardized ^{a)}		unstandardized			
Variances	JP	1.39	1.38	0.35	1.05		
	DE	0.77	0.77	0.19	0.59		
Covariances	JP	-0.54		-0.23			
	DE	-0.27		-0.12			
Means	JP			0	0		
	DE			0	-0.43		

a) Common metric standardization: The scale is standardized for the entire sample. The variances of the latent variables in each group therefore differ from 1.

つまり、情動的要素の全指標が尺度等価であるという仮説は裏づけられなかったが、少なくとも4指標のうち2つが尺度等価であるということは支持された。厳密に言えば、このようなモデルは部分的に尺度等価であると言える。モデルのパラメーター推計のいくつかは図2で示されており、より具体的な概観は表1に見られる。表1-2の中央部の規格化されていない因子負荷量と、右側のコラムの中の日本標本のための誤差分散が図1の推計と合致する。さらに、表1-2の左側の部分は

共通のものさしにおける規格化された因子負荷量を表している。これらは1番目と2番目の因子に関して十分に高い因子負荷量を示している。1番目の因子においては、全ての規格化された負荷量が.5よりも大きく、二番目の因子においては3つのうち2つの負荷量が比較的大きい。「早い—遅い」尺度はたった.41の規格化された因子負荷量を示しており、どちらの調査対象者グループにおいても、この尺度が“幸せな状態にある人間”に関する暗示的な意味を負わないことを示唆している。

モデルの全体的な適合度は良いが、すばらしく良いとはいえない。比較的小さな標本であったことにも起因して、35自由度と $p=.54$ での χ^2 値(33.5)というのはいいのだが³⁾、日本標本の標準化残差平均平方根(RMR=.057)はあまり良いとは言えない。適合度指標(GFI)は許容範囲内だが、その差は.95以下にとどまっている。日本人学生は「強い—弱い」「早い—遅い」を付加的指標として含む“力量性慣性”という大きな概念よりも、感情的な面では活動性により強く結び付けられているようだ。もし我々が活動性の誤差とPFEEL尺度2つの尺度等価のとの間の自由相関(free correlations)を認めるのなら、このモデル適合度は大幅に改良されるだろう。2自由度の損失は極めて有意差のある χ^2 値の低下(33.5から21.26)を生み出すだろう($p=.94$)。日本標本の標準化残差平均平方根は0.04にまで低下し、GFIは.98に上昇するだろう。上記のような結論は“日本では活動性に高い価値が置かれる”という観察に大変うまく適合するかもしれないが、我々をもっと簡素なモデルと共に留まる。これは、モデルの更なる改良が他の標本に複製可能ではないような、標本に特殊なモデルを生み出してしまうリスクを増加させるからである。

われわれは直交次元を見つけてはいない。むしろINERTは肯定的な感情とあまり相関していない。もし人々が肯定性において評価付けられるのだとしたら、人々を力量性で高く評価するというような微かな傾向は見られる。共分散は有意である。もし共分散が0に固定されれば、 χ^2 は7ポイント以上低下する。

興味深いことに、日本人学生の回答の分散はドイツ人学生のそれよりも広がりがある。モデルは双極尺度の分散、対応する潜在変数の分散、および誤差分散を分解する。日本標本の潜在変数の分散はドイツ標本のそのほぼ2倍である。例えば、規格化されていない変数PFEELは日本の標本では.35の分散であるが、ドイツ標本では.19である。INERTに関しては、日本標本で1.05であるのに対して、ドイツ標本では.59である。日本人調査対象者は、ドイツ人調査対象者よりも、よりさまざまな方法で刺激項目に反応しているようである。観察された分散の他の部分で興味深いのは測定誤差である。「甘い—酸っぱい」尺度における測定誤差は日本の値(誤差分散1.74)がドイツでの値(誤差分散.70)よりも絶対的に大きい。同じことが「否定的—肯定的」尺度にも言える(日本1.14 vs. ドイツ.35)。これと対照的に、日本では他の2つの尺度等価の測定が低い誤差分散になっている。また、ドイツ人グループにおけるINERT指標の誤差分散は、日本人グループのそれと比べて全体的に低い値にある⁴⁾。

3) この表は、図1で報告されたNormal Theory Weighted Least Squares (Normal theory 重み付き最小二乗法) $\chi^2 = 32.81$ ($P = 0.57$)からやや逸脱している。しかし我々は、二つのグループの χ^2 値の合計と同じであるという理由において、前者の推定を利用する。

4) 測定装置の信頼度を評定するためには、誤差分散はその観測変数の全分散に照らしあわせなければならない。しかし、本調査の関心が日本語の「幸福な人」とその表現に対応するドイツ語の翻訳glücklicher Mensch

「幸福な人 /glücklicher Mensch」の評定に用いられた基準 (i.e., SD 尺度) は両グループの調査対象者に同様に機能する。しかし、分析が明らかにしたのは、日本人学生とドイツ人学生は「幸福な人 /glücklicher Mensch」が持つ暗示的な意味に微かな違いを見ていることである—情動的評定に関してではなく、力量性に関してである。表1が示すように、日本人グループに関して PFEEL と INERT の平均値が、ドイツ人グループに関しては PFEEL の平均値がゼロに設定されている⁵⁾(表1-2の下から二番目の行を参照)。もし後者の係数が自由に設定されていたら、 χ^2 値は有意差の無い1自由度で2.8下がる。そうなればこのモデルにおいて、「幸福な人」と glücklicher Mensch の暗示的意味はかなり類似しているということになる。しかしながら、もしドイツグループの INERT の平均値をゼロにすれば、 χ^2 値は有意に6ポイント上がる。つまり、ドイツ人学生は日本人学生よりも“幸せな状態にある人間”を幾分ではあるが非 INERT (-.43) なものとして受けとめている—言い換えれば、彼らは“幸せな状態にある人間”にもう少しだけ力量性を結びつけて捉えている。

4. 考察

本研究は小規模なものではあるが、幸福という概念の理解に関する日本人とドイツ人の類似点および相違点に光をあてている。ここでいくつか但し書きをしておかねばならない。まず、本調査の調査対象者は大学学部生というかなり画一的なグループであり、日独両国それぞれの真のサンプルとして機能しない。全人口調査を行えば異なる結果が生まれるかもしれない。過去に行われた複数の国際調査において報告された日本人の生活満足度はかなり低いものになることがしばしばである一方で、本調査によって報告された日本人調査対象者の生活満足度の高さは目を引く。これは日本とドイツ両国における「大学生」の社会的立場の違いを映し出しているのかもしれない。また、直交因子が見つからなかったという事実はまた、ドイツと日本の回答者の社会的背景の違いによるものかもしれない。さらにここで述べておきたいのは、本データは2011年3月11日の東日本大震災以前に収集されたものである。この震災以前と以後に長期調査を行った内田(2011)によれば、震災は日本の若年層の幸福感に影響を与え、約半数が現状に対する再評価をするようになったという。

5. 結論

本研究が報告する調査結果は、日本人とドイツ人にとっての「幸せな状態にある人間」の概念が同一であるということを証明しないが、それらが比較可能であることを示している。幸福が異なる文化において同じ意味を持ち、同じように理解されているのかという問いは、容易な答えを許さない多くの様相を持っている。それゆえに賢明なのは、この複雑な問題を一つの研究の中で投げかけられるだけのより細かな、具体的な質問に再構成しなおすことである。本稿でわれわれは「幸福な人 /glücklicher Mensch」の明示的意味と暗示的意味の間の言語的な区別に取り組み、その作業にSD法を用いた。この手法は、[評価性] [力量性] [活動性] という、社会的感情の空間のような何かを

の暗示的意味における比較にあることから、この作業を省く。

5) これはモデルの特定に必要な不可欠である。

一緒になって構成する3つの次元を認めている。我々は評価的な暗示的意味の側面に焦点をあてて取りくんだが、同時に部分的にはあるにしろ、力量性と活動性という指標がどのように観察概念と結びついているかについても検証した。

我々にとっての主要な研究課題は「幸せな状態にある人間」という概念が、日本人学生とドイツ人学生の間で同じような暗示的意味を呼び起こすのかどうかにあった。力量性と活動性に関して、我々の実践的分析は初期的回答を出しただけに過ぎない。これは我々が用いた指標の数が、広義で包括的な概念を特定するには少なすぎることによる。特定できた潜在変数は、力量性と活動性の両者の指標を構成し、力量性慣性と呼ばれるかもしれない。この変数の測定モデルは尺度等価であり、ドイツ人学生が *glücklicher Mensch* という言葉により少しだけ高いレベルの力量性を見出していることを示している。

本研究がもたらしたその他の結果は、幸福研究のより中核を成しているものである。過去の国際研究において日本人から極めて低い幸福度が評定されることに関し、日本人は自身の幸福度を控えめに言うか、或いは幸福よりも他の人生目標により高い価値を置いているのではないかという議論が時になされる。「メタ評価」とでも呼べるかもしれないことに関する、文化的に形作られた態度も関与しているのかもしれない。例えば Kitayama and Markus (2000: 139) は「日本では、良い出来事というのは、はっきりとした肯定的な暗示的意味をしばしば持たない」ということを示唆している。そして「幸福な状態にある人間」の概念の内容は、ここで扱われた二つの文化の中では同じではないかもしれない。この仮説を支える間接的な証拠は、「至高体験」つまり幸福な出来事に関するポジティブ心理学の見地から来る。Hoffman and Muramoto (2007) によれば、日本人の至高体験は他者とのかかわりの中での喜びを典型的に含み、その一方で西洋の人々は最も喜びに満ちた楽しい出来事というものは自分だけで経験しがちであるらしい。このような、またその他の文化的違いというものは当然ながらことばの意味、特に暗示的意味の側面に反映されているだろう。それゆえに我々は、「幸福な状態にある人間」の概念を示す日本語とドイツ語が、二つの調査対象者グループに同じような反応を呼び起こすのかどうかを明らかにしようと試みた。一つの答えは、現実の世界の中でしばしばあるように、「場合による」である。もっと具体的に言えば、我々が使っている尺度による。もし「肯定的—否定的」の双極尺度が適用されれば、日本人学生は「幸福」をドイツ人よりも肯定的には評価しない。その一方で、日本人学生は「暖かい」と「幸福な人」をドイツ人学生よりもある意味近いものとして捉えている。「良い—悪い」尺度が最も良くできているが、これは意味空間上の1次元だけを際立たせている。1つの項目だけを用いるかわりに、我々はデータに適切な、より調和のとれた、部分的に尺度等価のモデルを用いた。このモデルによれば、日本人学生とドイツ人学生は幸福の評定において有意に異なるわけではない。我々は社会全体の中に違いを見つけられるかもしれないが、そのような違いは今回の調査対象者グループの中には存在しないようである。インタビューという形を取れば人々は本当の幸福度についてやはり控えめに述べるのかもしれないが、日本人学生とドイツ人学生を比較した中では幸福の価値的評価には大きな差がないということを示す小さな証拠が本稿には少なくともあると言える。

別表 A1 T-Test for mean differences – happy person

	Japan		Germany		T
	N	mean	n	mean	
fast and slow	81	3,7407	134	3,7537	-.071
dry and wet	81	4,8272	133	3,5489	8,213
severe and lenient	81	5,3951	132	5,4091	-.081
noisy and quiet	80	4,7875	133	4,0301	4,465
sweet and sour ***	81	2,7654	133	2,7068	.320
negative and positive ***	81	5,8025	134	6,6194	-5,426
bad and good	82	6,1098	134	6,1642	-.362
warm and cold	80	1,8375	133	2,2331	-2,825
strong and weak ***	80	2,8250	132	2,3258	2,859
active and passive **	81	2,4198	133	2,1203	1,815

Mean differences between both groups: * p<0.01 ** p<0.05, *** p<0.001

Appendix : Table A1: Semantic Differential: Number of cases (n), means, standard deviations (stdv) and t-values of difference of means test.

	Item	country	N	mean	stdv	T
1	fast and slow	1 JP	81	3.7407	1.33957	-.071
		1 DE	134	3.7537	1.28868	
2	dry and wet	1 JP	81	4.8272	1.18100	8.213 ^(**1)
		1 DE	133	3.5489	1.05505	
3	severe and lenient	1 JP	81	5.3951	1.31033	-.081
		1 DE	132	5.4091	1.18486	
4	noisy and quiet	1 JP	80	4.7875	1.08725	4.465 ^(**1)
		1 DE	133	4.0301	1.26095	
5	sweet and sour	1 JP	81	2.7654	1.46007	.3202)
		1 DE	133	2.7068	.98305	
6	negative and positive	1 JP	81	5.8025	1.22902	-5.426 ^(**2)
		1 DE	134	6.6194	.73367	
7	bad and good	1 JP	82	6.1098	1.17595	-.362
		1 DE	134	6.1642	1.00520	
8	warm and cold	1 JP	80	1.8375	1.03659	-2.825 ^(**1)
		1 DE	133	2.2331	.96049	
9	strong and weak	1 JP	80	2.8250	1.35735	2.859 ^(**2)
		1 DE	132	2.3258	.99231	
10	active and passive	1 JP	81	2.4198	1.23353	1.815 ²⁾
		1 DE	133	2.1203	1.05914	

*) p ≤ 0.05; **) p ≤ 0.01; 1) equal variances assumed; 2) different variances assumed;

References

- Argyle, M., M. Martin and J. Crossland. 1989. Happiness as a function of personality and social encounters. In: J.P. Forgas and J.M. Innes (eds.) *Recent Advances in Social Psychology: An International Perspective*. Amsterdam: North Holland, 189-203.
- Brislin, Richard W. 1970. Back-translation for cross-cultural research. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 1(3), 185-216.
- Chen, Guo-Hai. 2010. Validating the Orientations to Happiness Scale in a Chinese sample of university students. *Social Indicators Research* 99/3, 431-442.

- Colby, Benjamin N. 2009. Is a measure of cultural well-being possible or desirable? In: G. Mathews and C. Izquierdo (eds.) *Pursuits of Happiness. Well-Being in Anthropological Perspective*. New York, Oxford: Berghahn Books, 44-64.
- Diener, E. and E. M. Suh (eds.) 2000. *Culture and Subjective Well-being*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Heise, David R. 1970. The semantic differential and attitude research. In: G. F. Summers (ed.) *Attitude Measurement*. Chicago: Rand McNally, 235-253.
- Hoffman, Edward and Muramoto, Shoji. 2007. Peak-Experiences Among Japanese Youth. *Journal of Humanistic Psychology*. 47(4): 497-513.
- Kahneman, Daniel. 1999. Objective happiness. In: D. Kahneman, E. Diener and N. Schwarz (eds.) *Well-Being: The Foundation of Hedonic Psychology*. New York: Russell Sage Foundation, 3-25.
- Kitayama, S. and H.R. Markus. 2000. The pursuit of happiness and the realization of sympathy: Cultural patterns of self, social relations, and well-being. In: Diener, E. and E.M. Suh (eds.) 2000. *Culture and Subjective Well-being*. Cambridge, MA.: MIT Press, 113-161.
- Lewis, C.A., L.J. Francis and H.G. Ziebertz. 2002. The internal consistency, reliability, and construct validity of the German translation of the Oxford Happiness Inventory. *North American Journal of Psychology* 4, 211-220.
- 内閣経済社会システム . 2010. 「平成 21 年度国民生活選好度調査」 <http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/senkoudo.html>, English translation available at http://www.dijtokyo.org/research/happiness_in_japan
- Osgood, C. E., Suci, G. J. and Tannenbaum, P. H. 1957. *The Measurement of Meaning*. Chicago: University of Illinois Press.
- Osgood, Charles E. 1964. Semantic differential technique in the comparative study of cultures. *American Anthropologist*, 66/3, 171-200.
- 内田由紀子 . 2011. 「日本文化における幸福感」 計画行政 34 (4), 21-26.
- Veenhoven, Ruut. 1993. *Happiness in Nations: Subjective Appreciation of Life in 56 Nations 1946-1992*. Rotterdam: Erasmus University Press.
- Veenhoven, Ruut. 2008. Sociological theories of subjective well-being. In: M. Eid and R. Larsen (eds.), *The Science of Subjective Well-Being: A tribute to Ed Diener*. New York: Guildford Publications, 44-61.

Happiness in Japan and Germany – An assessment by students

Florian Coulmas⁴

Wolfgang Jagodzinski⁵

Rie Suzuki⁶

Annelene Wengler⁷

Abstract

It has often been argued that the East Asian understanding of happiness differs from that of Western societies because Asian societies tend to be more collectivist, while Western societies put a premium on individualism, and that, therefore, happiness in both cultures is difficult to compare. One way of investigating to what extent Western and East Asian societies differ with regard to happiness-related cognitions, evaluations and emotions is to examine lay theories of happiness. This paper reports on a survey about happiness carried out among Japanese and German students. Based on the results of the questionnaire and a Semantic Differential about 幸福な人 and *glücklicher Mensch* we describe the structure of beliefs about the causes of happiness and well-being. The findings show that there are both communalities and differences some of which are consistent with the notion of Japan as a more collectivist society than Germany, while others call for a different interpretation. The Japanese and German notions of happiness are similar but not identical.

Key words: Lay theories of happiness, intercultural comparison, Semantic Differential

4. ドイツ日本研究所東京, German Institute for Japanese Studies Tokyo (coulmas@dijtokyo.org)

5. Universität zu Köln, Institut für Angewandte Sozialforschung, ケルン大学応用社会学科 (wolfgang@jagodzinski.com)

6. 成蹊大学国際教育センター, Seikei Institute for International Studies (rie_suzuki@ejs.seikei.ac.jp)

7. Universität zu Köln, Wirtschafts- und Sozialwissenschaftliche Fakultät, ケルン大学経済・経営管理・社会科学部 (wengler@wiso.uni-koeln.de)